

残されたこと

加藤文子

九月はじめ、母は静かに息をひきとった。かねてから自宅で最期を迎えたいと、望んでいた。往診の先生や介護の方々のお力添えをいただいて、母の願いはかなえられた。

「充分生かしていただいて満足……。だから、神様が迎えに来てくださるのを待っているの」、そんなことを言うようになって間もなくのことだった。

母がノートに残したことをばを添えて喪中ハガキを用意した。書きすすめる中には共通の知人もいて、ふいに在りし日のことが思い出されるのだった。

「おばちゃん、何か食べるものある？」と、隣に住む従兄弟の初ちゃんが突然入ってきて、冷蔵庫をのぞく。

幼い頃、伯父一家と私たち家族は同じ敷地に住んでいたの、互に行ったり来たり毎日のことだった。

盆栽屋の跡を継いだ伯父家族は母屋に住み、伯父を手伝っていた弟である父は隣に住むことに



なった。父と母、二人の兄、そして末っ子の私は、四畳半と六畳、小さな板の間のある家に暮らした。

祖父がおせわになった方から、「垣根は作らず兄弟仲良く助け合って暮らさない」と助言され、家のあいだに境は作らなかった。

そんなこともあって、子どもたちは自由に行き来していた。隣で遊んでいるうちに眠ってしまった、抱かれて連れ帰ってもらったこともしばしばだった。

伯母は料理が得意ではなかったようで、むこうで食事をした記憶がない。一方、母は料理好きで、乏しい食材を工夫するのも上手だったので、従兄弟たちは食べるのを楽しみにしていたようだ。

とりわけ長男の初ちゃんは、生まれてからしばらく母が世話したこともあり、親のように慕ってくれて、よく顔を出した。そして何か食べたいと、言うのであった。

その初ちゃんも七十代半ばを迎えた。彼も家業を継いで盆栽屋になった。

双方の子どもたちが兄弟のように交わり、遊んだ日々から半世紀が過ぎた。あの頃は喧嘩もしたけれど、仲直りもできた。

成長とともに少しずつ離ればなれになって、それぞれの人生を歩んでいる。他界した従兄弟、長いことあえない従兄弟……、じゃれあうように一緒に過ごした時間が夢のようだ。

いつの日から行き来の跡絶えてしまった初ちゃんに、喪中ハガキのほかにお便りも書いた。なぜか、そうしたくなった。

「ごあいさつを短く書くつもりが、思いが湧いて便箋数枚になっていた。
「一度あっておきなさい」、そう母に促されたような気もする。

晩秋の庭で、末枯れた糸ススキや野紺菊のあいだから竜胆の花の紫が眼を見開くように咲いている。

それは思うように口がきけなくなつた母が、まばたきもしないで、もの言いたげに私をじっと見詰める様子に似ている。はずかしくなるくらい、目を離さないまなざしに……。



リンドウがみている